

報新屋新聞

甲斐川市代623

E-mail
maotomo@
island.dti.ne.jp

トカラ塾H.P.
http://www.
tokarajuku.
sakura.ne.jp

「狂」と「飢え」の世界に

のたうちまわる

曹俊園(吉田篤主宰)での

茶わんかご編み教室(教え

る人: 勢司恵美と社主)

三月二十四日「ナントク: 窓

澤賢治」(トカラ塾主催)

三月二十日「竹にまつわるよまやま語」

我孫子市のいるる展(堀井裕子

主宰)での社主の語り。

三月十日 松本のみずす細工仕事展出張

三月十七日 千葉県流山市の真澄

左に、載せた写真から物語は始まる。まず、社主の狂騒の三月から説き起こそう。



伊藤博敏作(石)

三月十日の仕事展の

前夜は吹雪だった。

スタッフの面々と七人で

松本市の東郊のソバ

屋「富貴」で飲む。

その場に合流したのが伊藤博敏氏だった。なんと、二十五年ぶりの再会である。変わらぬ風貌にまず驚く。氏は石の仕事をこころ。名刺には「お墓ディレクター」とあるが、そろそろ境界を跨いで活動している。酒席でカレリダーを贈られたのだが、それには氏の作品(上の写真はその一部)が写っていた。シャツを開いた唇のなかの出っ歯が笑っている。ドキッとさせられた。が、生々しさの面では、むしろ純毛の白布の「葉」が勝っているかも知れない。布のふちをかがるひと針ひと針の不揃いさ



ころげ落ちるタナ

まてが、手縫いの柔らかさを表している。そういえば、氏は三十年近く前から、この手の作品を創っていたことを思ひ出した。ゆたしの社主の中の記憶の映写機が逆回転していく。そのとき、氏は、時間を一気に吹き飛ばすように語りかけてきた。「あの、銀座の画廊でやった竹展の遺い棚はおもしろかった。」の一語が、こちらの記憶を全開にさせ、二十五年前のタコト台に社主を立たせた。

その棚(一頁下の早草)とは、どんなに工夫しても、モノが収まらない棚で、こぼれ落ちるのが決まりきっている棚である。それを出品したことがある。ふち取りしている竹が波打ち、まっすぐな平面にはならない。これは幸甚地悪としているのではない。吟味をすることもなく、常識として、かたずけてしまおうと直々への抗議であった。人口に膾炙する例として「竹を創ったよう

な性格」とか、竹のようにまっすぐな」という形容詞に社主ははじめなかつたまごである。それなら、ぼんといふで、竹林の斜面を下から上方に登りながら、竹の幹だけを採別の対象にしたがう、伐り出した。上から下へ降りたのでは幹(根元)は見えない。竹は天へ伸びるにしがたが、太味や直線を回復させ、どれもが似たような桿になつていくが、根元は多種多様である。

△ ○ ○

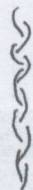
へそ曲り竹はまきりなかつた。

両側の石に挟まれた間から這い出そうとして、もがいた果ての竹は板状になつて顔を出していた。

それと作品におきかえるときは、椅子の台座になったり、食卓上の皿になつた。



また、一度はこんな竹を手にしたことがある。前社会は埃埃の空南市にあったのだが、倉裏手には貸し(管作り職人)が住んでいたのだが、あるとき、酔っぼらうてバイクに跨がり、側溝に頭から突っこみ、首の骨を折って即死したことがあった。縁者がどこにいるか分からないうちに、ひとり身であったから、住んでいた家は筒屋もなしで、柱が朽ち、瓦の重みで、家屋全体が崩れ落ちた。数日後、瓦を押し上げると、して、太い孟宗竹が顔を出した。そして、別の年には、先行の竹に比べると巻くようにして、新しい竹が成長した。竹に竹がむと回っていた。そのような曲がり竹を使って、連棚を作った。作品をどのように使うかは、使手の勝手であるから、モノを置くかなくても、かまわずにゆけた。



社主の抗議は止まらなかつた。照明をばばば、照明具や座れない椅子なども作品として展示した。どのように照明をばばば、

光源を竹筒の中に肉じこめてしまうの
 だった。竹筒のところがころに鋸で点に
 近い小穴を開ける。そと、最後の一ミリ
 か二ミリの薄皮と、削けなご残すべく、
 そこから漏れてくるものは、星座のよう
 は、オレンジ色の輝きだった。

また、ビのように座れないかという、狐
 を描く二本の子皿宗竹を利用して、木馬
 の形をしたもの(左の写真)を作った。
 両足のバランスをとりながら、こころを落
 せない。もはや、用具とはいえないかもしれない。
 下半身が不自由な人には迷惑な品だ。
 という後ろめたさがあったのだが、我欲を
 止められなかった。そうしたら、これを



求めてくれる人がいた。「体の不自由な息子
 の機能回復訓練用に使いたい」と言う
 のだった。作り手の頭の中の常識が「後
 ろめた工」につなげていたのだが、逆
 に、常識を一蹴されてしまった。

へへへへへへへへ

話が竹をされるが、近くの海岸でタマネギ
 を拾ったことがある。海に注ぐ川沿いにあ
 る曲取地から流れ出したものか、あるいは、
 民家の台所から転がり落ちたものなのか、
 波に洗われて中味が溶けていた。外側
 の繊維質だけが薄くタマネギの
 形をとりあてていた。細状の繊維がマスク
 ンの表皮の模様に似ていた。向う側が
 スリステに見える。十分に美しいと思った。
 この中に光源を入ると照明具になるな
 と皮算用とはいく。元はといえばゴキ
 である。ゴキをヤマトに敷衍すれば、排泄
 物すら美しくもなるのである。

この敷衍の仕方は偏向しているかも知れない。
 また、狂気とは言いまわらないまでも、その予非
 ではある。では、その気狂いもどきが何から生ま
 れたのだろうか。狂気の反語が正気と言え
 るなら、コトは簡単である。たしかに、洋の
 面では魔女狩りのようなこととまで、狂気の
 一掃に血道をあげているが、社主のなかの気狂い
 は正気と仲良しである。やはり抗いと表現す
 ることにしよう。

何に對してのそれかといえば、周囲の環境に
 對してである。家庭や
 学校、あるいは、人と
 のつながりであったり
 する。子供じみに反抗
 が初めにあった。ただ、
 それだけならば、は
 やばやと環境と手打
 をすませたはずである。

空気がテーブル



ハニカのような、一時の反抗がないのが厄介である。抗いは時代の思潮へも向けられていたのだろうか。

この気狂いが中国大陸にいくと、意味がもっと鮮やかになる。白川静さんの説を借りれば、中国人ほど狂の語を愛した民族はいないであろう。

「正常とされるものの平凡とひ弱さ」と対して(中略)強烈な意志と破壊的な論理をもち、新しい創造への行動力にみちた、ある不合理なものと意味した。」「それが常に新しい思想を生み、文学を生み、芸術を生んだ。伝統の圧力が強ければ強いほど、その比喩の大きさに比例して反ばる。」「文字遊にのびの湯まが激しいほど、創意がほどい、され、おあげに言えは、文化が生まれる、ということになる。元ち足りたはかからず、何も生まれない、と言っているに等しい。



ここに木の枝を穴に刺しているチンパンジーの足裏がある。ロバート・ジョージ・ラックの1900年4月号に載る葉である。西アフリカのセネガルで生態観測をしているジル・フルエ氏が確認した。チンパンジーの狩猟行為である。自分の歯で木の枝の先端を削って槍と考案し、その穴を木のうろに突っ刺している。中には小動物のシロウガラシが息を殺して潜んでいる。

こうした狩猟行為は、群れのなかで地位の低いメスや若いチンパンジーのみがする。群れに君臨するオスは、餌を独り占めにして周囲に分け与えることはない。槍の制作を思いついたのは、飢えがしからしめたのだ。

0.0.0.

当社取扱書籍

伊藤氏年代表記	文化新社協賛	2012年	4900円
瀬渡子右衛門の纏	みずのり出版	2012年	1900円
日琉境界の島	NJS出版(CD版)	2008年	3000円
埋み火(うすひ)	書肆しほほん	2003年	2200円
17年目のトカラ・平島	ふくろう社	1995年	2500円
密林のなかの音奇	ふくろう社	1996年	

伊藤氏が「あの柳は、おもしろかった」と発語した背景には、カレンダーに載せられている、フワとした、なんとも柔らかな暖みの中に、み出た石毛布にあるように思えた。それは「飢え」であり、「狂」でもある。飢えは欲(創作意欲)の大きさに比例している。

注文方法 同封の振替用紙利用。または X-URL . デンワでの注文。

齋報 齋屋新聞社

戦場カメラマン・馬淵直城の死

佳禾英社刊 二〇〇六年

社主が馬淵氏と初めて出会ったのは
四八年前である。半世紀前と言
換えると、それだけで時代証言
になりそうなのでさきごに思える。
二十歳の馬淵氏は大学のテニス部
のエースであった。厚い胸板の長身で
ラケットを振り下ろすのだから、対戦
相手はその体躯に圧力を感じ
たことだろう。社主が最後に会

わたしのなかに
クメールの血が流れている

たのは、最晩年の二〇一五年の五月であった。
糖尿病と患っていて、痛々しいほどのヤセオ
だった。
その変貌ぶりは氏の生き方の反映でもあ
ろうか。体内にはまほどの榴弾の破片が
摘出されないまま、死に至るまで宿って
たというし、永年患っていた糖尿病は、
体調を整える時間もないまま、戦場
を駆け巡らなければならなかったツケ

わたしが見た
ポル・ポト



馬淵直城

キリンブルーを駆けぬけた青春

だったかも知れない。あるいは、取材中に
遭遇した火事で、新建材が吐き出す
熱い煙を大量に吸いこんで呼吸器を目
されていたこともあった。基礎体力がある
から、過信もあっただろう。仕事に待ち
時間ができると、徹夜で麻雀を兼し
むこともあった。晩年は自定のあるタイ

のバンコックから一時帰国して、療養に専心
していたのだが、かなわなかった。

△ ○ △

社主は二十代の初め、氏と同じ下宿屋で寝起
きしたことがあるが、交友はいたって淡泊であ
二年の学年差があったことはさて大きな理
由ではなかった。それよりも、片方が現役の学
生であり、もう片方がすでに退学届けを出
して、学校に顔をを出すこともなく、ブラブラ
していたからだろうか。親しさが生まれたの
は氏が四十歳になるかならないかの頃から
先であった。

そんな永い間隔を置いてはながう、違和も
なく再会できたのは、互いがその自覚してあ
からだろう。その日暮しというのは、食後に園で
物乞、同然の生き方としていたという意味では、
明日何として暮すかは、当日になぞみなければ
分かんないというとりとめ、無さを前面に押し
出している日常という意味である。

いま、社会は氏の動きを熟知しているかのこ
とまよふ言ひをしたが、そんなことを知ったの
ば、だいたい経ってからだ。とりとめも無い
という自覚が馬淵氏にあったかどうかは
分からぬが、氏に近寄っていくこちら
側には用意されていた。諷刺る自分が
ないことを思い知らされていたので、相手
の日常をとりやくく聞き出す軽口がた
たりない。氏も社主に対して、日常の細
部への詮索には関心がなかった。当然
の結果であるが、お互は、いわば、真実の
さらけ出しでつきあいが始まったのだ。た
ゞ

その戦場というも、ほとんどがカンボジア
国内であった。戦争があればどこにでも

心んでいく人ではなかった。ひとこと言え
ば、クメール人と、その人たちが居住してい
る地に魅せられたのだ。連れ合、も
クメールの血が流れている人だった。クメール
とは民族名で、現在のカンボジアの全人
口の八割以上を占めている。
氏も最初に戦場に呼び寄せたのはベト
ナム戦争である。一九六〇年代後半には
りると、米軍の北ベトナムへの空爆が激しく
と増す。国際法を学んぐ外交官になる
心づもりをしていた最中に一枚の写真を目
にした。米軍の爆撃で傷ついた少女が
上半身裸で腕に包帯を巻き、泣き
ながら松葉杖をついて歩いている。
首には大きな十字架が下がっていた。
氏はこの報道写真を机の前の壁に



はり、反戦の思いをうつらせる。そして、「いつか
は自分も戦場に行こう」と写真を通して反
戦に寄りしよう」との想いが胸中を走る。
法と宗教の無力を見せつけられ、官途への
王道をあっさり捨ててしまった。

〇〇〇

氏には何冊かの著述があるが、『わたくしが
見たボルネオ・トリッキン・グライルズを駆け
ぬけた青春』（集英社刊、二〇〇六年）を
著したのが、死の五年前である。そこに一
貫して流れているものは、クメールへの怒りで
あり、同時に、カンボジアを三十年間にわたり
戦場に巻きこんだ大国のエゴへの憤怒で
ある。そのエゴを報道する大新聞社や大
通信社の救いたい保身にも怒りの矛先
を向けている。自社の不利になることは報
道しないという打算である。また、亡命政
府や反政府軍の発表があると分かれば、
取材権利を多額で独占して、二つのな

発表を稿審みにした記事しか流さない。両陣営からのコメントを取材するのはなく、弾の当らない場所にて、望遠レンズでとらえることができる範囲内での映像しか報道しない。付け加えるならば、著名人の談話ならば、無審査で採用する姿勢もやり玉に挙げている。

〇〇〇

氏はアメリカ側でもない、解放軍側でもない取材を心掛けてきた。だから西側ジャーナリストが避けて通るクメール・ルージュの解放区を二ヶ月余にわたって取材している。ホレ・ポトへの取材が二回敢行させたのは氏ひとりである。そのときに確信がもてたことは、西側が大声で叫ぶ「ホル・ポトの大虐殺」が、実はベトナム戦争で敗退したアメリカが仕立てた宣伝であるということである。社まも「大虐殺」を信じていたひとりである。しかし、氏の説明



を聞いているうちに、あれこれと疑問がわいてきた。

六百万人の人口の三分の一に当たる三百万人がホレ・ポトに虐殺されたというが、実はそれより前に、アメリカがベトナム戦争を遂行するために、隣国接国のラオスやカンボジアで、最低百万人を殺している。それは沖縄、基地から前進したB-52戦闘爆撃機によるところが多大である。そうしたマイナス戦果をホレ・ポトの作業にすり替えようとしている。

そのほか、「大虐殺」が行われたというツール・スレには、虐殺博物館が現在建てられているが、旧中学校を転用している。急ごしらえの監獄で、教室を薄板で

仕切っただけのもの
である。収容可能な人員は
五十人から六十人止まりである。
△△△

社まは氏の記述からウソを感じ取れなかった。だからといって、もう手を挙げずの欲知もできない。欲を言わせてもらえば、「大虐殺」のより微細な記述が欲しかった。細部を語ることが全体を理解する上で、大きな力になるからである。時間経過に耐えられる記録はそのようなものである。そのことは氏も承知していたはずであるが、どうしても、想いが先行しがちな文章になっている。

そんな不満を並べてみても、この本の重荷が軽くなることはない。氏がこのおもてに語っていないだけに、文章には説得力がある。歴史が真実を明らかにしていくであろうこと信じているから、その種や

な語り口と言えようか。また、氏が二石
と投げようとしているのは、大団の犯した罪
ばかりではない。それを援護射撃する
報道陣と、そこから発信される報道
を鵜呑みにする民たちへの警告鐘も
たれぬ。

死の七ヶ月後、生きていれば六十八歳の
誕生日になる日に、カネシマの湖で
散骨が行われた。「...世界の六ヶ国
の友人の方々も参加していただき、
散骨の儀も無事に終えることが
できました。終了直後から暴風雨
になり、身も心もクメール人になった兄
からの強烈なメッセージが送られて
いるのでした」という使いが奥
妹のヨコ子さんから届いた。

多くの人に送られた人だった。

△△△

5月21日(土)
川谷(兄)の帰郷報告会
於伊東美香宅

△川谷さんとの安心野菜の生産者の
主宰者が帰ってきた。どこから帰ってきたか
というと、四国や九州を含む西岸の
日本列島のタビからであった。二十三日前
にわたるトラック・マンションのタビだった。
軽トラックの荷台にリッパな居住空間を
作り、そこに寝泊りしての移動である。
実際には、畳の上での就寝も多かった
ようだ。訪ねた先々で熱烈歓迎の
ノボリ旗が立てられたらしい。

出発は新潟県長岡市なのだが、報告会
は地元と東京の二箇所で行われた。社主
は郡内の会場(渋谷区的美香さん宅)
に顔を出した。参加者は二十人弱の
二十代の若者(三十代に突入した者も
いたのかな?)たちとひとりのオジシ

(この方は、片足を棺桶に突っ込んでいた) だった。鮮度の高い内容の最後に講師
がしめくる。「これから次の四つを当面の
目標にします」と。

一、就農二年目の本年は、農業者として暮らしている
証を立てたい。

二、ゲストハウスを
兼ねた私設公
民館を設けたい。
三、地域に根を張
り、寺子屋を起
す。

四、空屋紹介。

田舎暮らしを望
む都会人と地元
民との橋渡し役
五、自然エネルギー
の導入。小水力発
電、太陽電池



あんまりがニハラなまていから

つづけてほしい

四月二十九日

小諸のお祭り

長野県小諸市の
中心部から北に車で
十五分ほど行った高

原に会場があった。元は東京都世田谷
区の所有するグラウンドだったらしい。

その後は乗馬クラブが使用していたのか、
乾いた馬糞がグラウンドの隅に寄せてあ

社主は会場の地名も祭りの名前も分
からぬまま参加したのだが、二日面が

心地よかった。

大きなバオが設置されていて、そこが主
会場だった。ここで講演会が開かれ

たり、原発事故の写真展も行われ
ていた。つい三週間前にはナガ(在、誠

訪之瀬島)の詩の朗読会と、ホブ(在
大鹿村)のコンサートがここで開かれ

た。

また、野外ステージも設けられてい
て、何組かのアーティストたちが演

奏していた。インドの吟遊楽人の音曲であ
るバウルのメロディーも流れてきた。バウル
集団とともにインド国内を吟遊した経験
のある田村イタル(佐久在住)の出演だった。
夜の部としては、炎の演技が迫力満点
だった。桜が満開の下で百人以上の人が若
者たちの熱のこもった演技にクギ付け
になっていた。

テント張りの店が二十ほどはらび、多
面の作り手が作品を展示即売していた。

木工、織り、陶芸、野菜、お焼き、その他
ある。社主は竹細工のワークショップを手
伝う。隣り町の御代田に住んでいる吉田

ホズミが六角目竹がこ編みのワークショップ
をやっていて、その手伝いである。ホズミは

竹細工の指導を別所温泉にある竹
遊会がやっている。この会は松尾昌

彦が代表者で、カゴ作りだけでなく、竹
の炭を焼いたり、竹の民具作りとして

いる。ふたりは三月十日の松本での竹の集
にも来てくれた。

さわやかな祭りであった。夜は、こころ
に張り水たテントやティ、ピイの中から
談笑が直夜までももてきた。

八月一日(土)日

近江八幡市で

暮らした竹具を
かけて八二年。富嶺
県日之影町在住の

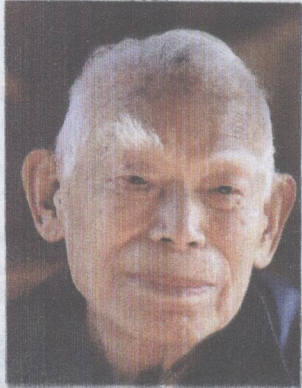
廣島一夫さん(97)の作品が勢揃いする。

会場は滋賀県近江八幡市のNOIMA

社主も小さな講話をする。詳細は園封、
チラシで。

チラシで。

「ホリ(俺)が作るカゴは
見たもののじゃねえ
とよ」 廣島(ひろしま)一夫氏

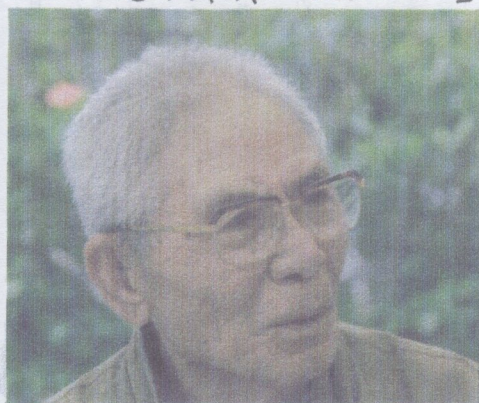


聞きに行かなきゃ、生涯の損。七月のトカラ塾は一家で行こう。梅ヶ丘へ。

「人間の運命やあ、分からんもんですよ」

半田正夫出征記 & ナツメ南拓記

才六回 ナオの南風語り



半田正夫

PHOTO 荒川健一

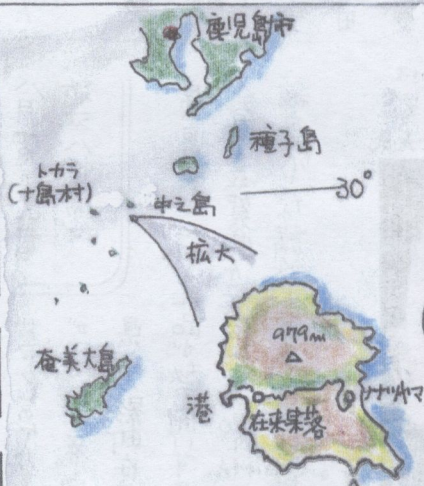
大正十二年(一九二三年)生まれで、九十歳になる人の表情はみずみずしい。昭和十九年に征召して、南オに向う。三千五百人の兵を詰めこんだ船が佐世保港とあとにする。台北の港に寄り、オリックン沖にさしかかった夜、米軍の魚雷で沈む。

大シ斤のバシー海峡で兵が次々と死んでいく。半田さんは三日目に友軍の駆逐艦に発見されて死に一生を得る。助けられた数日後、またも魚雷にやられるが、これも救助される。ルソン島に上陸した後は、ジャングルの中を、食料補給を断たれたまま、現地人ゲリラと米軍の総攻撃に逃げまどう。同僚がバタバタと倒れるなかで、けがひとつもない。「千三分の一」のあだ名がつけられた。同期の船舶工兵が二〇〇人いたなかでの希少な生き残りであった。復員後は、郷里の奄美から内地へ向かうが北緯三十度と境にして、日本から切り離されてしまった。通航がままならないから、途中のトカラの中之島のナツメヤマの浜に上陸する。そこに内地を旨指人が次々と吹き溜まっていく。食うための南拓が

トカラ塾 H.P.

<http://www.tokarajuku.sakura.ne.jp>

ナオの南風語り
七月二十八日(土)午後三時
会場はギャラリー・ガラ
小田急線の梅ヶ丘駅
から徒歩二三分。



始した。半田さんが語る「ナツメ南拓群像」は、まさに「人種つぼみ」である。当日は映像と録音を多用しながら、ナオ(社主)が独話する。入場無料。詳しくは同封封筒を

社史編纂室便り

尾瀬の三平峠

昭和39年6月



こんな証拠写真が
地下金庫に
収められていた
?!

巻の噂では、社主はヤシ(テキ屋)上がりだとは聞いていたが、それほどの肝玉の持ち主

と思えず、信用する者はいなかった。それがまたくの偶然から、確たる証拠写真が出てきた。本社屋は十四年印刷(一九九八年)の失火で全焼したのだが、本年に入り、チャップリン・トイレを新たに作ることにした。直径三メートル、深さ一・五メートルの穴を掘っていると木箱が出てきた。それは茶箱のようだった。フタをあけてみると内側に銀紙が貼ってあり、中味は湿気をまぬがれてピンピンしていた。銭は容かたちもない。もともと預貯金はゼロだったようだった。封筒から出てきたのがこの一葉であった。裏書きによると「昭和三十九年六月 尾瀬沼へ抜ける三平峠で」とある。社主はここでカルピスをパイ二〇円で売っていた。

同じ広場には前橋から週末に通っているアイスクリーム屋があった。こちからはほんのちよこっぴのクリームを五十円で売っていた。カルピス(本当の中味は森永コーラスで、この方が仕入れ値が安い)人気があがって当然である。クリーム屋は社主に「行商の仁義があるべし」とすこめ、気弱な社主は近くの通称「見晴し台」へ移る。それにしてもよく売れた。十円玉で二万円分を運ぶのはひと仕事だった。これは週末二日分の売上金である。山手森の初乗り賃が十円のころである。社主が「ブー」したのは、人生でこのときだけだったようだった。竹細工を始めるはるか前の話である。(おわり)



平島で
2010.9

書欄

虫ヶネと
お手元に



この書は新聞に連載された記事と二冊にまとめたものである。明治維新は一八六八年の戊辰の年である。それから数えて六十年目の戊辰の年、つまり一九二八年、昭和三年の正月の諷刺物であった。維新の動乱をくりぬけた古老たちが多く存命であったから、内容も多岐にわたり、時代の気分が後世の読者に伝わってくる。

『戊辰物語』 東京日日新聞 社会部編 万里閣書房 1928年

復刻 岩波書店 1983年

「踊れ」と言われる。相政はその場で自分の小指を切り落し、血だらけの小指を杯に入れ、血の考いたなご杯を洗って、殿に返杯する。

「あつは入れが稼業でござんす、昔入じやぬ、みりやせん」 吹呵ききった。一読すると、なんともない、大話であるが、維新時の市井の治安を考える上では、格好の物語である。この騒動期には、江戸の南北両奉行所に与力向心が総出したが、総督、殿士人であった。百千人を超える大郡市の治安がこの数、すむことに、誰も不思議がらない。当時、政米が日本に米でいた人たちは、岩倉の良士に驚かしている。

切り捨て御免の暴力におびえる卑屈さが、ケニカ茶屋を必要としたし、また、小指を落しての抗議にいたっては、真正面からの対等な抗議がままならぬから、まずは自身を痛めつけ、相手に買ひ目を求める。無視される場合もあり、謝罪迫進の場合もある。身分差という、その極めつけが、自害しての抗議である。また相政は、「侍にはかなわぬが、昔人にと、き卑賤な者と同じ扱いをされたのでは、迷惑、とち主張している。エ、ド、レスな差別意識が、市井に根を張っている。

ケニカ茶屋が繁栄したのは、公儀が暗黙に認める、幕府奉行の代行者だったからであり、けして自右能力の高さを物語ってはいない。

冷静さも同根である。硬直化した仕組への價りに昇革することに不慣れな人々の諦観であろう。

昭和三年の写真、か？

原角昭翁(南町奉行跡) 幕末の最後の生き残り



それは人々が平和を望み、自右能力にたけているからだとみやすのは早い。